

国際スポーツイベントの開催是非における被災地住民の心理的構成概念の抽出と比較 —ラグビーワールドカップ開催地の岩手県釜石市を事例として—

Extraction and Comparison of psychological constructs of afflicted residents In hosting international sports events.

—Case Study of KAMAISHI (IWATE Prefecture) Host City of 2019 Rugby World Cup.

スポーツクラブマネジメントコース

5015A322-5 松瀬学

研究指導教員 間野義之教授

1. 序論

1.1 研究の背景

わが国では、2019年にラグビーワールドカップ（以下：W杯）、2020年には東京オリンピック・パラリンピック大会が開かれる。これらのイベント開催における国内的課題として、2011年3月に東北地方で起きた東日本大震災からの復興がある。その象徴的な地域として、岩手県釜石市（以下：釜石市）は、日本選手権7連覇で有名な新日鉄釜石ラグビー部のOBと行政のリーダーシップのもと、ラグビーW杯開催地に立候補し、2015年3月、開催地に決定した。釜石市は「ラグビーのまち」として全国的に知られており、ラグビーW杯を契機とすることで、復興の促進を目指している。地方消滅が危惧されている中、衰退地域にて国際スポーツイベントを開催することが地域活性化にどういった影響を与えるのかを考える上で、釜石住民のラグビーW杯開催の是非を把握し、住民の複雑な意識に着目することは意義がある。

1.2 先行研究

震災復興とレジリエンスに関する研究では、原田（2012）が「東北地方の特徴として、災害などの外的要因に対する減災・復元力（レジリエンス）に優れていた」としている。また和泉は（2015）は、地域レジリエンスは、まちのアイデンティティに基づく「記憶」の共有に着目している。加えて、震災復興と国際スポーツイベントに関する研究では、西原・佐藤（2004）が、国際スポーツイベントは開催地の人々に大きな影響を与えると指摘しており、藤本・犬飼（2012）は、東日本大震災の復興におけるスポーツ・チームやスポーツ選手の支援活動は、被災地の人々の「生きる力」に影響を与えたとしている。一方、国際スポーツ大会が被災地の住民に活力を与えるなどの実証的研究を行ったケースはまだ、ほとんどない。被災地で

ある釜石市に関する研究では、向山（2014）がW杯招致段階における住民の意識を調査しているが、インタビュー調査の対象が3人と少なく、開催決定後の住民の意識については言及されていない。

2. 研究分析

2.1 研究の目的

本研究は、2019年ラグビーW杯の開催決定後の東日本大震災の被災地・釜石市の住民意識に着目し、W杯開催の是非における被災地住民の複雑な意識を明らかにすることを目的とした。

2.2 研究の方法

事前調査としてインタビュー調査で住民のラグビーW杯開催に対する是非の傾向を探った上で、量的調査による被災地住民の属性把握と、質的調査による心理的構成概念の抽出を行うミックスメソッドによる調査を行った。事前調査のインタビュー調査は3人を対象に実施した。量的調査では仮設居住者か非仮設居住者かを分析の軸とし、それぞれ各150名、計300名に対して実施した。同時に質的調査のインタビュー調査は計46名を対象に実施した。分析においては対象者の属性のバランスを考慮し、ラグビーW杯開催賛成が仮設：8名、非仮設：8名、ラグビーW杯開催反対は仮設：7名、非仮設：7名の計30名に絞って行った。

3. 量的調査の結果と考察

量的調査では、非仮設居住者と仮設居住者、年代で比較を行った。ラグビーW杯開催の賛否においては、非仮設居住者の平均値は5段階評定で3.89であった。仮設居住者は2.99で中央値をわずかに下回った。W杯に向けた一体感の必要性においても非仮設居住者の平均値は4.37と高く、世代間の差があまり見られなかった。仮設居住者は3.39で、非仮設居住者との平均値の差は0.98あった。ともにt検定を実施したところ、仮説—非仮設居住者の間には有意な差が認められた（ $p <$

0.01)。しかしながら、多重比較では、仮説一非仮設居住者の間に主効果は認められたが、年代には主効果がなく、仮設群の年代別、非仮設群の年代別でも有意な差が見られず、交互作用も認められなかった。

W杯開催の賛成・反対理由においては、賛成理由では「釜石が有名になる」に次いで、「復興を加速する」が2番目に多いのに対し、反対理由では「施設運営費が負担」に次いで、「復興が遅れる」が2番目に多くなっていた。復興における受け取り方が賛否で相反する結果になった。

4. 質的調査の結果と考察

質的調査では、W杯開催の是非における釜石市住民の心理的構成概念を抽出するため、インタビュー調査（定性的分析）を行った。分析ソフトを使ってコード化を行った結果、35のコードと15のサブカテゴリーの固まりを抽出し、さらに上位概念のカテゴリー・構成概念として9つにまとめられた（表1）。

表1 構成概念一覧

番号	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
1	行政関係	合意形成	情報不足
		施設	あと利用への不安 施設の活用
2	復興関連	復興速度	復興遅れ 復興促進
		生活	生活不安 生活上
		雇用	雇用不安 企業誘致
3	経済的効果	経済	財政不安 経済不安 建設不安 交通不安 活性化 価値創出
		コミュニティ	創造的復興 スポーツタウン バリアフリー
		人的交流	交流人口 国際交流
5	地域課題	高齢化	高齢化不安 過疎化不安
6	ラグビー資本	V7時代	思い出 ラグビー環境
7	人と人のつながり	一体感	一体化効果 一体感欠如
		ふるさと	郷土愛 誇り
8	まちへの愛着	将来	希望 感謝 子どもの夢
		生理的欲求	心の健康 からだ健康 自己超越
9	レジリエンス	大会気運	盛り上がり

9つのカテゴリー・構成概念ごとにW杯賛成、反対における仮設、非仮設、つまり4グループに分けて比較、考察した結果、住民の多様で複雑なW杯開催への意識が分かった。特にW杯開催賛成群と反対群、あるいは仮設居住者と非仮設居住者

の意識の内実の違いがあることが分かった。釜石市の特徴として、4つのグループとも郷土愛を強く抱き、新日鉄釜石ラグビー部黄金時代の「まちの資産（記憶）」を認めながらも、現状のラグビー環境に対しては批判的であった。またW杯賛成群ではW杯開催を契機とし「ラグビーのまち」としたい強い意向が示された。一方、構成概念の各カテゴリーの強弱を評価するため、カテゴリーごとの発話（コード）数を比較した（表2）。

表2 構成概念の発話（コード）数の比較

カテゴリー	賛否	仮設	非仮設
行政関連	賛成	3	3
	反対	9	6
復興関連	賛成	16	10
	反対	13	11
経済的効果	賛成	9	3
	反対	4	12
まちづくり	賛成	21	19
	反対	10	3
地域課題	賛成	6	2
	反対	4	5
ラグビー資本	賛成	16	9
	反対	8	5
人と人のつながり	賛成	8	10
	反対	3	8
まちへの愛着	賛成	6	10
	反対	4	10
レジリエンス	賛成	9	12
	反対	4	2
小計		153	140
合計発話(コード)			293
(賛成172、反対121)			

発話の総数は「復興関連」「まちづくり」において多く、仮設居住者と非仮設居住者の相違が大きい構成概念が「ラグビー資本」「人と人のつながり」「まちへの愛着」だった。とくに「ラグビー資本」においてW杯賛成・仮設居住者の発話が多いのは、新日鉄釜石ラグビー部のV7（1978－84年度）時代の「記憶」と関係があると考えられる。

5. 結論

2019年ラグビーW杯開催決定後の東日本大震災の被災地・釜石市の住民意識に着目し、開催の是非について注目した結果、仮設一非仮設居住者のW杯開催の是非に対する実態を把握でき、是非につながる9つの心理的構成概念が明らかになった。加えて、構成概念別における比較・考察で、仮設住宅居住者と非仮設居住者の意識の内実の違いがあることが判明した。W杯気運を高めるためには、特にW杯反対群の仮設居住者を巻き込んでいく住民の一体化が不可欠であると考えられる。